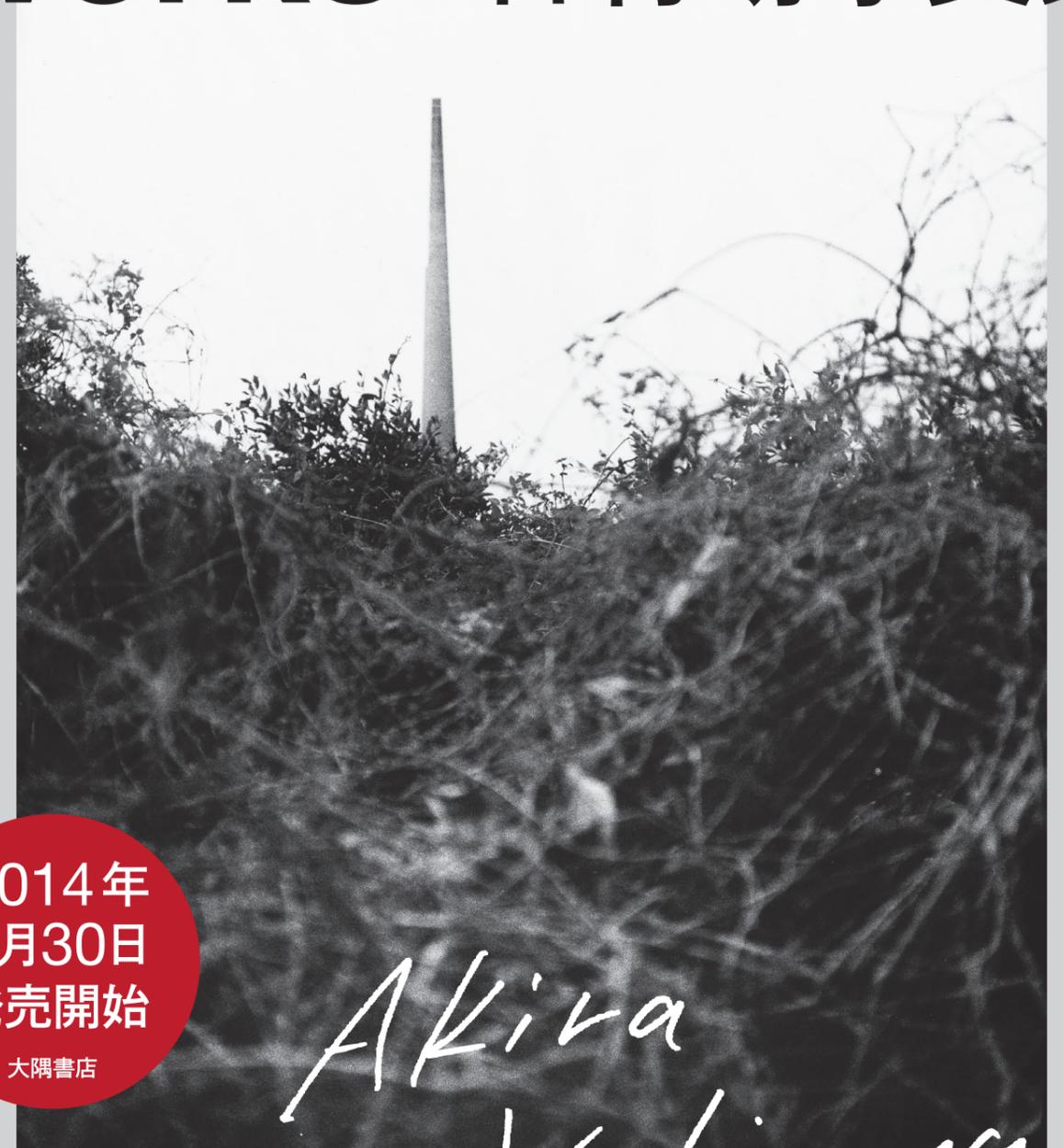
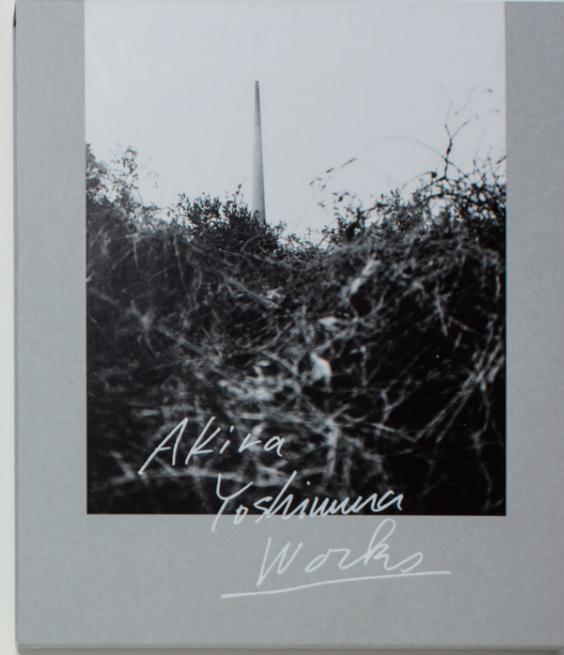
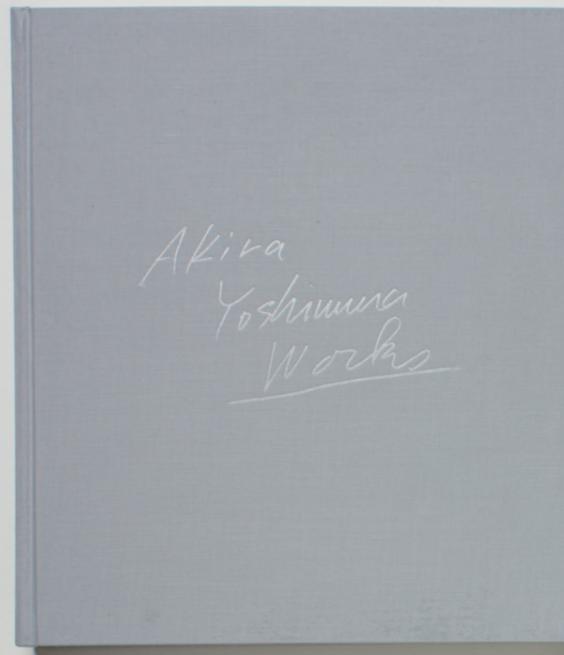


# Akira Yoshimura Works 吉村朗写真集



2014年  
9月30日  
発売開始  
大隅書店



## Akira Yoshimura Works 吉村朗写真集

編集／深川雅文・湊雅博・山崎弘義  
定価（本体6,000円+税）

### 目次

分水嶺 / The River  
闇の呼ぶ声 / Dark Calls  
新物語 / New Story  
ジェノグラム / Genogram  
Akira YOSHIMURA  
1994-2001  
Recent Works  
参考資料

### ■解説

「闇の光 吉村朗の軌跡」 深川雅文  
英文抄訳 Traces of Akira Yoshimura (1959-2012)  
独文抄訳 Auf den Spuren von Akira Yoshimura (1959-2012)  
仏文抄訳 L'itinéraire d'Akira Yoshimura (1959-2012)

### ■作品データ

■展覧会  
■掲載・著書・コレクション  
■略歴

2014年9月30日発売  
B4変形判上製 / 320頁  
スリーブケース入り  
300×260×33mm  
ISBN 978-4-905328-07-0 C0072

### 発売場所

全国の主要書店、オンライン書店、大隅書店HPほか

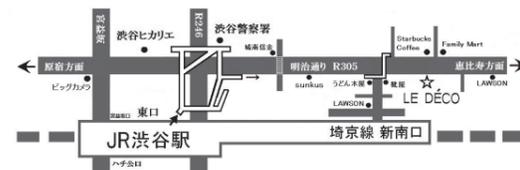
### 問い合わせ先

#### 大隅書店

〒520-0242 滋賀県大津市本堅田5-16-12 コマザワビル 505号  
Tel: 077-574-7152 Fax: 077-574-7153  
Website: <http://ohsumishoten.com/>  
E-mail: [info@ohsumishoten.com](mailto:info@ohsumishoten.com)  
\*書店様へ ご注文はJRCへ (Fax: 03-3294-2177)

## 予告 写真展「闇の光 吉村朗の軌跡」

会期 2014年12月2日(火)より12月7日(日)まで  
会場 Gallery LE DÉCO 3F(東京 渋谷)  
開場 11:00 - 19:00 最終日 11:00 - 17:00  
Website <http://ledeco.net>  
主宰 吉村朗写真展実行委員会  
連絡先 湊雅博 [info@masahirominato.com](mailto:info@masahirominato.com)



吉村が挑んだ“新たな物語”のための写真—それは、まさに実験であった。1980年代半ばより都市のスナップ写真家として脚光を浴びた後、1990年代に大きく作風を変え、日本近代という怪物をめぐって自己の実存と歴史のあり方を重ね合わせ問い掛ける問題作を発表し、内外の注目を集めた吉村朗。馴化されず、媚を売らず、自らの道を突き進んだ、孤高の写真家の待望の作品集、遂に刊行！

Akira  
Yoshimura  
Works



西大門刑務所／ソウル（「闇の呼ぶ声」より）



踊り乍ら駆け出す一仁川にて（「分水嶺」より）



大叔母／福岡女学院一五月の女王祭 昭和7年（「Recent Works」より）



ソウル、2001年（「ジェノグラム」より）

# 闇の光 吉村朗の軌跡

深川雅文

吉村朗は、1980年代半ばに、若くして日本の現代写真の世界で注目すべき写真家として脚光を浴びた。そして、1990年代に大きく作風を変えながら、2000年代の初頭まで実験的な作品を発表し続けた後、2012年に、53歳でこの世を去った。

吉村は、1980年代初頭、日本大学芸術学部写真学科在学中に「ザルツブルク・カレッジ・インターナショナル・フォトワークショップ」に参加し、同時代の欧米の写真表現の動向の洗礼を受けた。同大卒業後、東京総合写真専門学校の研究科に進み、在籍中から、個展およびグループ展で、都市に棲息する人々の姿を路上などの公共空間で軽やかに掬い取り独自の躍動感と浮遊感で捉えたストリートスナップの発表を積極的に行った。そうした活動が評価され、1980年代半ば以降、つくば写真美術館で開催された「パリ・ニューヨーク・東京」展（1985）、川崎市市民ミュージアムでの「現代写真の動向・展 TREND'89」などに参加し、その名が広く知られるようになった。この時期の代表作には、「街路疾走」（1989）、「街路迷走」（1991）、「街路を走る」（1993）がある。

1989年のベルリンの壁崩壊は世界に計り知れない衝撃を与えたが、吉村にとっても、大きな転機となった。第二次世界大戦後、東西対立と冷戦構造の象徴として存在した

壁の崩壊とともにその歴史的枠組みが崩れ去るのを目の当たりにして、吉村は、それまでのスナップショットの作品群を過去のものとして切り捨て、新たな針路に舵を切った。それは、日本の歴史に関わるテーマであった。明治以降、近代化に突き進んだ日本は、自らの権益を拡張し、繁栄を求めて諸国を侵略し、大規模な戦争を引き起こした。吉村が新たに追いつめたのは、日本の侵略の野望と戦闘的行為に端を発して生まれた、韓国、九州の佐世保や対馬など、国内外のさまざまな場所に残っている歴史的痕跡——朝鮮半島を二分する38度線、朝鮮統治のために日本が設置した西大門刑務所、日本海軍が遠方の艦隊と交信するために長崎に建設し現在も残されている巨大な電信塔、第二次世界大戦末期にアメリカを攻撃するために発明された秘密兵器である風船爆弾の資料など——であった。この時期の代表作には、「分水嶺」（1995）、「闇の呼ぶ声」（1996）、「新物語」（2000）がある。

「新物語」では、巨大電信塔など過去の戦争の痕跡のみならず、国の原発推進政策の象徴である茨城県東海村にある核燃料加工施設で1999年に発生した臨界事故をテーマにした写真も組み込まれていた。吉村は、被曝による従業員の死をもたらした悲惨な原発事故に、太平洋戦争期に日本の近代主義が見せた科学技術への盲進という負の痕跡を嗅ぎとり、その歴史的意識が現代においても生き延びていることを示す事態として、被曝を恐れずに現地に駆けつけ、施設周辺を撮影した。「新物語」は、日本の近代主義の歴史の闇を、たんに過去の事跡に追うだけでなく、現代の事象をも視野に入れて問いかけた意欲的な作品で、方向転換以後の吉村の最も重要な作品となった。

21世紀に入ると、さらに新たな側面が加わる。日本の近代化の流れに沿って日本統治下の朝鮮に渡り、医師や警察官吏として活動した父祖を持つ家族の歴史と、それに連

なる自分自身の存在を問いかけるという姿勢である。「ジェノグラム」（2001）では、京城で開業医を営んでいた祖父の家の門柱の跡の写真が組み入れられていた。その後、自分史との関わりがなかで日本近代の歪みを問う姿勢は、「u-se-mo-no」（2004）において、さらに大胆に展開された。「u-se-mo-no」は、吉村の最大の問題作のひとつであった。その中心となる作品は、吉村家の家族アルバムから取られた、花輪を冠った若く麗しき乙女が、花が咲き乱れた庭の中に置かれた白いお立ち台の上に、彫像のように立っている古い写真である。女性は、吉村の祖母の歳の離れた妹であり、彼にとっては大叔母にあたる。大叔母は、1885年にアメリカ人宣教師によって九州の福岡に設立された有名なミッションスクールで学んだ。その古い写真は、同校の創立記念日に行われる恒例の五月の女王祭の女王に選ばれた時に撮られたものである。撮影された昭和7〔1932〕年は、中国大陸で、日本軍の傀儡である満州国の建国が宣言された年でもあった。彼女は、裕福な家に嫁ぐが、晩年に窓から身を投げて亡くなったとされる。展示会場では、この大叔母に関する古い写真群とともに、南北朝線を隔てる38度線が未だに緊張を高めている東アジアの国際情勢下で、2001年に日本近海で起こった事件、北朝鮮工作船と巡視船との銃撃戦にまつわる写真と一緒に展示されていた。若き日に西欧化の潮流の洗礼を受けた大叔母に関する写真と、朝鮮半島を巡る政治的問題に起因する現代の社会的な事件に関わる写真をひとつの展示空間でぶつけることによって、日本の近代化を巡る“新たな物語”のイメージを浮上させることを狙った実験的な作品であった。

吉村は、失敗を恐れず、写真表現の可能性に挑戦し、実験的な試みを続けた。その精神は、挑発的であり、危うくもあり、人々を戸惑わせることもあった。国内の権威ある

写真賞には無縁の存在であったが、写真表現の前線で共に競い合った同時代の写真家や一部の評論家には高く評価された。吉村の写真の実験は、「夢日記」（2006）で終止符が打たれる。2010年、グループ展「ながめるまなざす」への参加を最後に東京から離れ、福岡県北九州市門司の実家に引き上げた。2012年6月2日、自分の誕生日の前日、この世に静かに別れを告げた。

今回、出版される写真集「Akira Yoshimura Works」は、これまで纏められることのなかった吉村の90年代から2000年代にかけての代表的な作品を収めた最初の写真集であり、作家が遺した作品・資料を元にして、後期の代表的な作品から「分水嶺」「闇の呼ぶ声」「新物語」「ジェノグラム」を再構成し、さらに、本人が生前にまとめていた（日本の侵略戦争の痕跡を追跡したシリーズの中から自身が選定した「1994-2001」と、内容的には「u-se-mo-no」に対応する「Recent Works」から成る）「Akira YOSHIMURA」を収めたものである。

（ふかがわ・まさふみ／キュレーター）

吉村 朗（よしむら・あきら）

写真家。1959年6月3日、福岡県門司市（現・北九州市門司区）に生まれる。本名は吉村晃（1991年頃、朗に改名〔通称〕）。1978年3月、福岡県立門司高等学校卒業。同年4月、日本大学芸術学部写真学科入学。1982年3月、同卒業。同年4月、東京総合写真専門学校研究科入学。1984年3月、同卒業。1980年代半ばより、都市のスナップ写真家として脚光を浴び、その後、歴史的事象を追った諸作品を発表して注目を集める。主な写真展に、「分水嶺」（銀座ニコンサロン、1995年）、「新物語」（「現代写真の母型1999 IV 鈴木理策/吉村朗」川崎市市民ミュージアム、2000年）、「u-se-mo-no」（イカズチ、2004年）、写真集に、『SPIN』（Mole、1999年）がある。2012年6月2日、逝去。